



生成AIを学校の授業で利用することへの 親の賛否とその特性

○水野 一成 (株式会社N T Tドコモ モバイル社会研究所)
近藤 勢津子 (株式会社N T Tドコモ モバイル社会研究所)

目的

生成AIを学校の授業で利用することに賛成・反対・分からないと
回答した親の特性を明らかにすること

調査概要

調査時期	2025.11
調査方法	訪問留置法
調査対象	全国 小中学生
標本抽出方法	層化二段抽出法・性別・学年・地域・都市規模で割付
回答数	1200組の小中学生とその親

分析方法：数量化理論第Ⅱ類

文科省のガイドラインにおいて生成AIを小中学生が利用することについては、
利用目的や態様等の情報提供を求めている

初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン(Ver. 2.0)【概要】



3. 学校現場において押さえておくべきポイント

	学校現場で利活用する場面	具体的な利活用例	利活用の際のポイント
教職員の 校務	- 校務の効率化や質の向上等、働き方改革につなげていくことが期待される - 新たな技術に慣れ親しみ、利便性や懸念点を知っておくことは、児童生徒の学びをより高度化する観点からも重要 - 内容の適切性を判断できる範囲内で積極的に利活用することは有用	- 児童生徒の指導にかかわる業務への支援 (授業準備、部活動、生徒指導等) ex. 授業で取り扱う教材や確認テスト問題のたたき台を作成する - 学校の運営にかかわる業務への支援 (教務管理、学校からの情報発信、校内研修等) ex. 各種お便り・通知文・案内文のたたき台を作成する - 外部対応への支援 ex. 保護者会・授業参観・保護者面談の日程調整に活用する	- AIサービスの最新の利用規約を確認・遵守する - 原則、重要性の高い成績情報等を入力しない 個人情報保護法等を遵守すること、著作権侵害につながるような使い方をしないこと - バイアス等の生成AIの特徴を理解した上で、出力された内容を採用するかどうかは必ず教職員が判断する - 管理職は適切な利活用がなされているかを確認する
児童生徒の 学習活動	- 発達の段階や情報活用能力の育成状況に留意しつつ、リスクや懸念に対策を講じた上で利活用を検討すべき - その際、学習指導要領に定める資質・能力の育成に寄与するか、教育活動の目的を達成する観点から効果的であるかを吟味することが必要 「生成AI自体を学ぶ場面」、「使い方を学ぶ場面」、「各教科等の学びにおいて積極的に用いる場面」を組み合わせたり往還したりしながら、生成AIの仕組みへの理解や学びに生かす力を高める	- 情報モラル教育の一環として、生成AIが生成する誤りを含む出力を教材に、その性質や限界に気付く - グループの考えをまとめる、アイデアを出す活動の途中段階で、一定の議論やまとめをした上で、足りない視点を見つけ議論を深める目的で活用する - 英会話の相手として活用したり、より自然な英語表現への改善や一人一人の興味関心に応じた単語リストや例文リストの作成に活用したりする - プログラミングの授業において、児童生徒のアイデアを実現するためのプログラムの制作に活用する 等	- 年齢制限等の最新の利用規約を確認・遵守し、教師の適切な指導監督の下で利活用させることが必要 教育情報セキュリティポリシーや教育情報セキュリティ管理者の指示等を遵守することが必要 - 氏名や写真等の個人情報を入力させないこと、著作権侵害につながるような使い方をさせないこと 出力に偏りがないかなど、教育目的に照らして適切かを教師が随時判断することが必要 保護者に対し、利用目的や態様等の情報提供が重要
	適切な利活用のために考慮すべきポイント		
- 教育委員会が主導して制度設計や利活用の方向性を示すことが重要 - 各学校の実態を十分に踏まえた柔軟な対応を講じることが必要であり、一律に禁止・義務付けるなどの硬直的な運用は望ましくない - 先行事例や教材・ノウハウの周知・共有、効果的な活用を促進する研修の実施により、生成AIの適切な利活用を推進する環境を整備することが必要	- 各学校が適切に生成AIの利活用を行えるよう各学校の実態を十分に踏まえた柔軟な対応を講じることが必要 - 教育現場の実態に即した教育情報セキュリティポリシーを教育委員会が策定、必要に応じて見直すことが重要 個人情報の取扱いに関して必要かつ適切な措置が取られているか確認すること。著作権の侵害リスクを低減するため、適切な予防措置を講じているモデルやサービスを選択することも考えられる - バイアス等のリスクや懸念を踏まえた教職員による最終的な判断が不可欠であることなど、適切な情報提供や研修等のサポートを行うことができるよう、体制の整備や知見の収集に努めることが重要 - 生成AIサービスを導入する際は、保護者の経済的な負担等に十分に配慮しつつ、適切な利活用を実現するための研修を実施するなど、丁寧な情報提供を行うことが必要		

教育現場における生成AIの実践的活用例や、生成AIに関する親子の認識に関する調査は一定数存在するものの、**親が捉える「子どもの生成AI利用」**に着目した研究は限られている

① 教育現場における生成AIの活用・影響

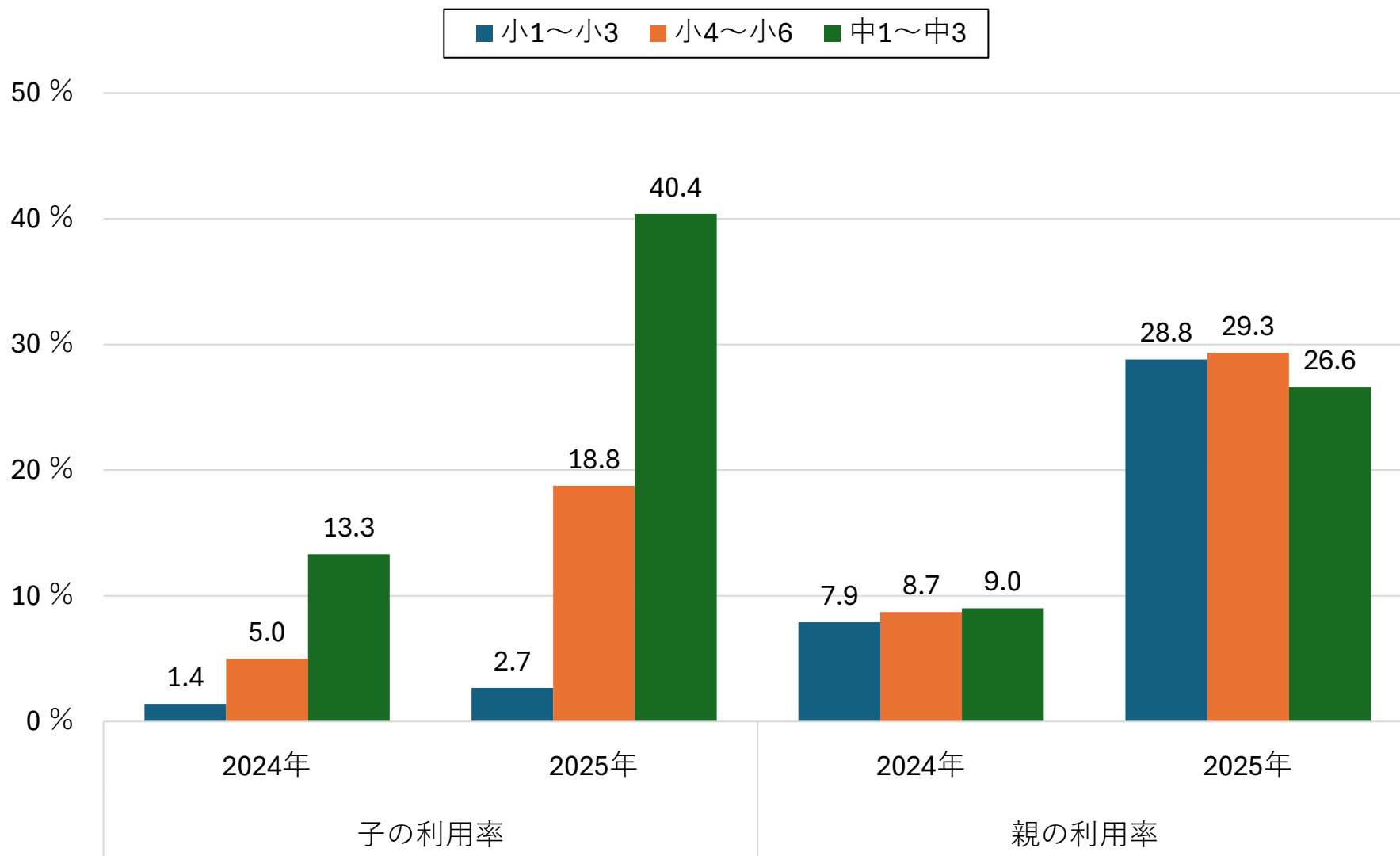
真木他（2024）中学校現場での授業実践を通じた生成AIの教育的活用に関する研究,科学教育研究センター紀要 Vol.3

小野沢(2024)学校教育における生成AI活用の現状と今後の課題

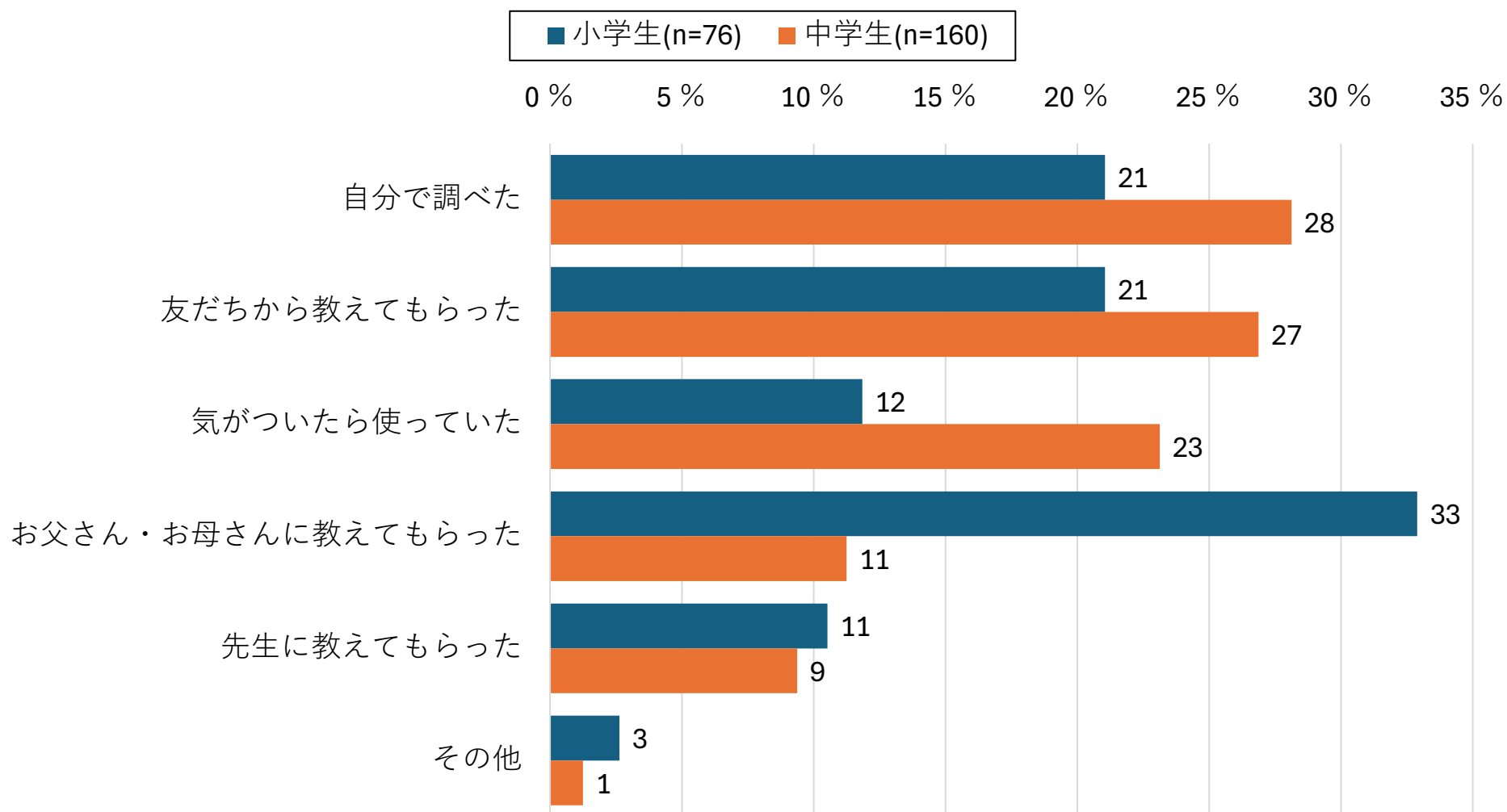
② 親と子の生成AIに関する意識のずれ

Yaman Yu(2024) Exploring Parent-Child Perceptions on Safety in Generative AI: Concerns, Mitigation Strategies, and Design Implications

中学生 生成A I の利用率は親より上回り、その差は前年より広がる

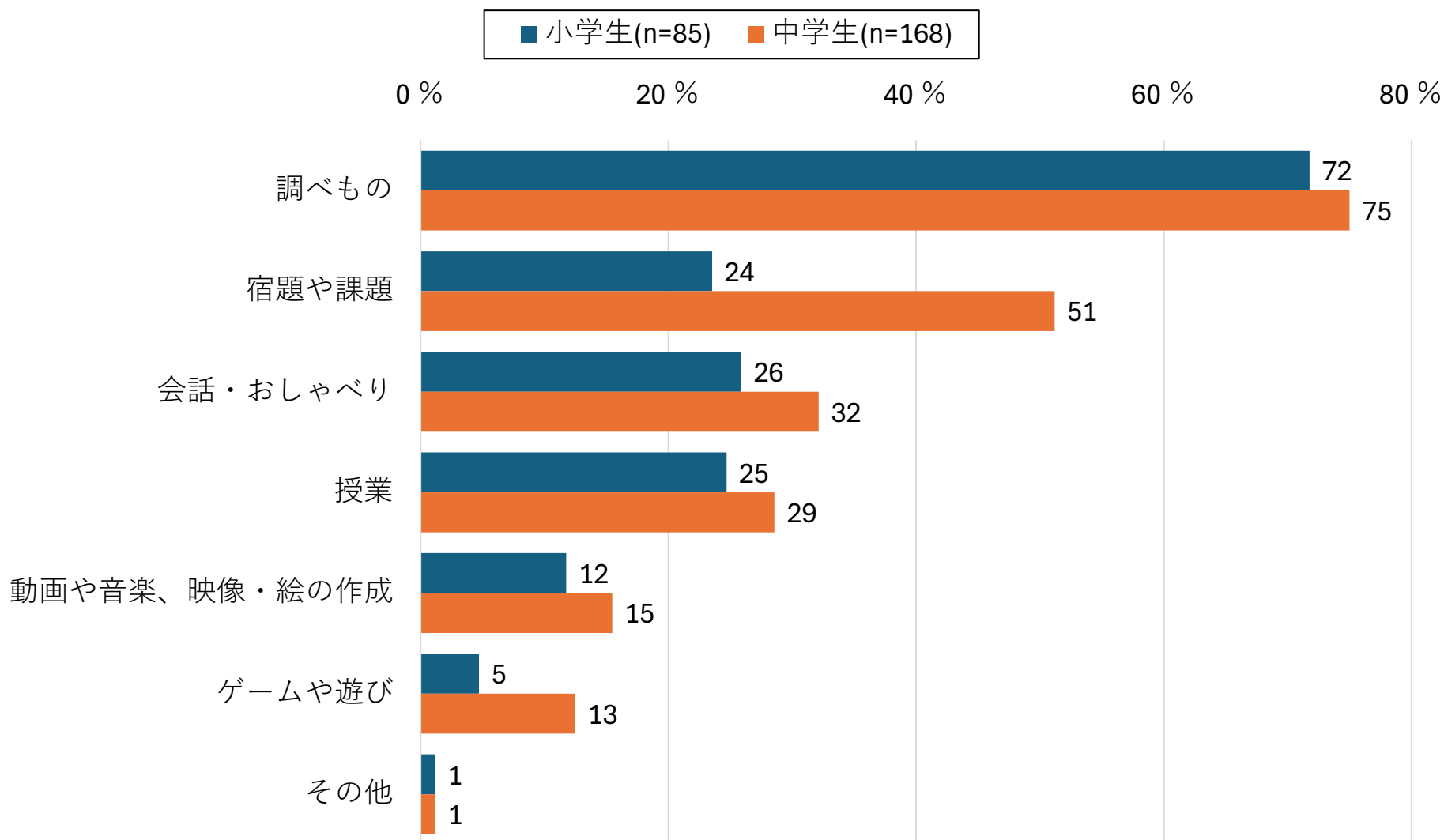


先生に教えてもらったは約 1 割



※生成AIを利用している人が対象

授業で利用しているは3割弱



※生成AIを利用している人が対象

■ 賛成 ■ やや賛成 ■ やや反対 ■ 反対 ■ わからない



■ 生成AI関連

親の生成AIの
認知

子の生成AIの
理解

■ 学校との関わり

教える体制

ICT授業頻度

学校の成績

■ 親の属性

性別

年齢

学歴

■ 子の特性

学年

自己肯定感

精神的自立

性別

判別的中率：71.4% 相関比 $\eta^2=0.20$ （1軸） 相関比 $\eta^2=0.11$ （2軸）

1軸 寄与率：63.8%

平均と標準偏差（群別）

	平均	分散	標準偏差
群1:賛成	-0.286	0.719	0.848
群2:反対	-0.121	0.690	0.831
群3：分か	0.847	1.137	1.066
全体	0.000	1.000	1.000

3 群（分らないの特性）

2軸 寄与率：36.2%

平均と標準偏差（群別）

	平均	分散	標準偏差
群1:賛成	-0.241	0.995	0.998
群2:反対	0.551	0.738	0.859
群3：分か	-0.100	0.809	0.899
全体	0.000	1.000	1.000

2 群（反対の特性）

1軸

アイテム名	レンジ		偏相関係数	
親の生成AIの認知	1.367	1位	0.228	1位
学校側が教える体制	1.127	2位	0.160	2位
子の生成AIの理解	1.090	3位	0.151	3位
子の学年	0.641	4位	0.117	4位
親子会話時間	0.632	5位	0.094	5位
親の学歴	0.397	7位	0.077	6位
子の成績	0.371	8位	0.065	7位
自己肯定感	0.333	10位	0.062	8位
親の年代	0.511	6位	0.058	9位
情報機器授業頻度	0.336	9位	0.055	10位
精神的自立	0.271	11位	0.047	11位
親の性別	0.054	12位	0.010	12位
子の性別	0.034	13位	0.008	13位

2軸

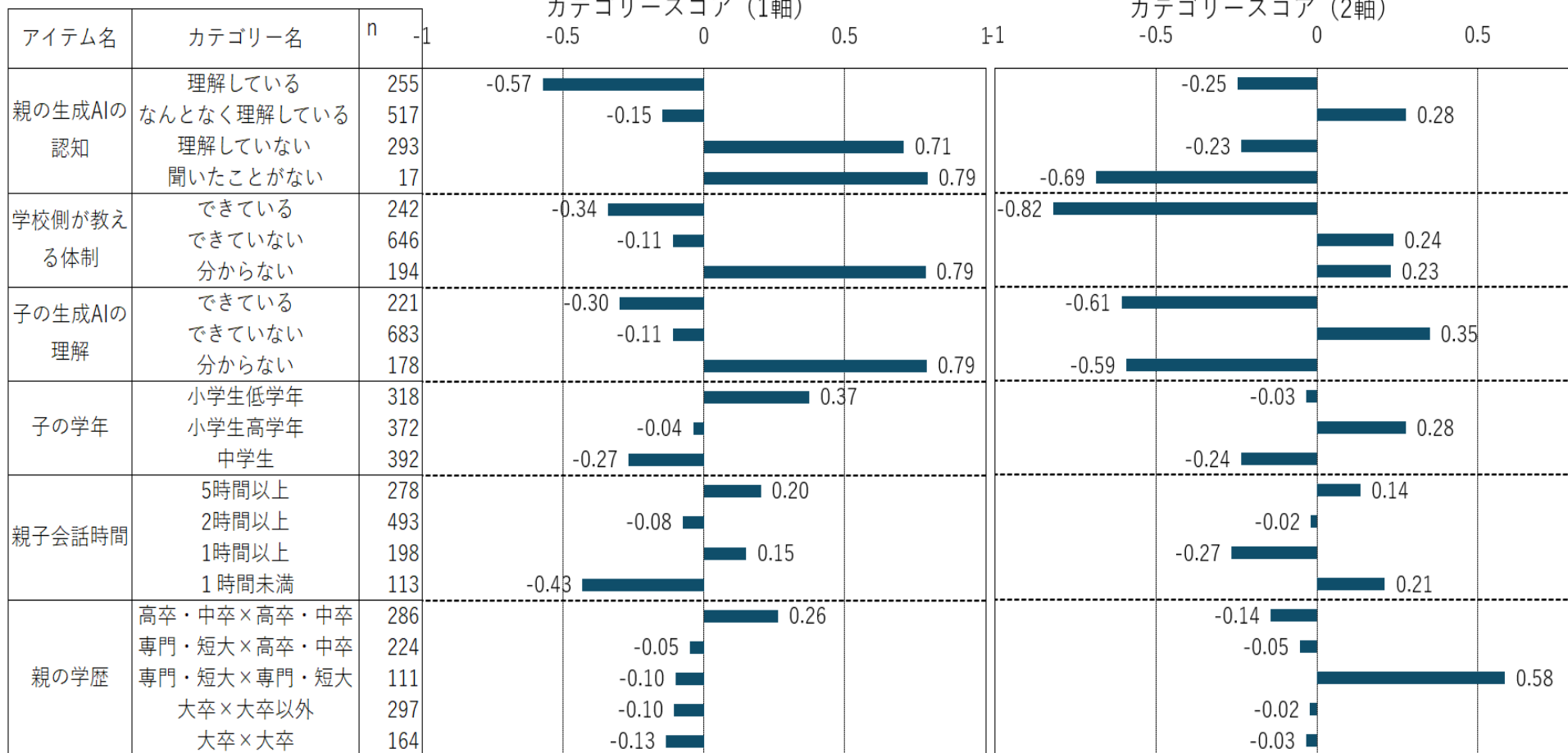
アイテム名	レンジ		偏相関係数	
親の生成AIの認知	0.964	2位	0.095	3位
学校側が教える体制	1.058	1位	0.148	2位
子の生成AIの理解	0.958	3位	0.154	1位
子の学年	0.512	7位	0.076	6位
親子会話時間	0.477	8位	0.053	9位
親の学歴	0.728	4位	0.072	7位
子の成績	0.436	9位	0.049	10位
自己肯定感	0.139	13位	0.019	13位
親の年代	0.302	12位	0.034	12位
情報機器授業頻度	0.406	10位	0.047	11位
精神的自立	0.642	6位	0.086	4位
親の性別	0.665	5位	0.085	5位
子の性別	0.327	11位	0.058	8位

賛成・反対 > = = < 分からない

賛成・分からない > = = < 反対

カテゴリースコア（1軸）

カテゴリースコア（2軸）



			賛成・反対 > = = < 分からない		賛成・分からない > = = < 反対	
子の成績	上位	308	-0.17			0.17
	中間	441		0.13		-0.10
	下位	281	-0.04			-0.08
	応えたくない	52		0.20		0.33
自己肯定感	高い	285	-0.09			-0.01
	中間	571	-0.05			0.04
	低い	226		0.24		-0.10
親の年代	30代前半以下	96	-0.32			-0.19
	30代後半	260	-0.03			-0.02
	40代前半	377	-0.03			0.11
	40代後半	247		0.12		-0.09
	50代以上	102		0.20		0.05
情報機器授業 頻度	毎日	131		0.08		0.30
	週数回	167		0.05		0.13
	週1回	144	-0.23			-0.07
	月数回	306	-0.06			-0.11
	月1回以下	334		0.10		-0.05
精神的自立	高い	161	-0.03			-0.18
	やや高い	340		0.08		-0.19
	やや低い	482	-0.09			0.27
	低い	99		0.18		-0.38
親の性別	男性	168	-0.05			-0.56
	女性	914		0.01		0.10
子の性別	男性	557	-0.02			0.16
	女性	525		0.02		-0.17

分からないは「親の生成AIへの認知」が低い
賛成と反対を分けたのは「教育体制」と「子の生成AI理解度」

賛成	反対	分からない
親の生成AIの認知が高い 教える体制が出来ている 子は生成AIを理解している 中学生	親の生成AIの認知がやや高い 教える体制が出来ていない 子は生成AIを理解していない 高学年	親の生成AIの認知が低い 教える体制が分からない 子の生成AIの理解は分からない 低学年

関連が見られなかった項目

親の性別

親の年齢

親の学歴

ICT授業頻度

学校の成績

自己肯定感

精神的自立

性別

NTTドコモ モバイル社会研究所のご紹介

- ・自由で独立した立場から、モバイルICTがもたらす「光」と「影」の実態を「社会調査」の手法で研究・分析
- ・東大名誉教授の廣瀬通孝所長の指導の下、社外の有識者3名を理事に迎え、様々な観点から調査を実施
- ・研究成果をモバイル社会研究所のウェブサイト・書籍(モバイル社会白書)、学会等で社会へ発信

【主な研究テーマ】

2010年から毎年実施している「モバイル動向調査(基礎調査)」に加え、時流に合わせた「ライフスタイルを軸とした個別調査」を実施



【組織】

< 理事会 >

所長／理事長

廣瀬 通孝
東京工科大学 教授
東京大学 名誉教授



理事

桑津 浩太郎
立命館大学大学院 客員教授
(元 野村総合研究所 研究理事未来開発センター長)



是永 諭
立教大学社会学部 教授
(メディア社会学科)



松田 美佐
中央大学文学部 教授
(社会情報学専攻)
社会情報学専攻放送倫理・
番組向上機構(BPO)委員



ご清聴いただき、ありがとうございました